

---

# 生徒会の新入り？

?紫苑?

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生徒会の新入り？

### 【Zコード】

N7349Y

### 【作者名】

?紫苑?

### 【あらすじ】

タイトルは後で変えるかもしません

あの、生徒会に常識人が！？

生徒会にもう一人の男子がいた

そいつはあの子の双子の兄で、鍵と深夏のクラスメイト！

## 存在しえないプロローグ（前書き）

初めまして？

または、こんにちは？

## 存在しないプロローグ

- ルール1 神の存在を受け入れろ
- ルール2 彼らに直接触れてはいけない
- ルール3 友達の友達は我ら、それが干渉限界
- ルール4 『企業』の意向は何よりも優先される
- ルール5 『スタッフ』は、個人の思想を持ち込むなれ
- ルール6 情報の漏洩は最大にして、最悪の禁忌である
- ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない
- ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。すべては利益の為に
- ルール9 性質上『学園』の『保守』は最大の命題である
- 追加ルール 今年の生徒会には気をつける  
特にヤツに手を出してはならない

はあ～ 今日も駄弁るだけかあ～（前書き）

^ ( - - ) <

はあ～ 今日も駄弁るだけかあ～

「世の中がつまらないんじやないの。

貴方がつまらない人間になつたのよつ～」

会長がこつものように小さな胸を張つて何かの本の受け売りを偉そうに語つていた。

僕がスルーする中、鍵はなぜか感銘を受けていた

「じゃ、童貞もそんなに悪くないってことですか？」

「ぶつ～。」

鍵はやつぱり鍵だった・・・

「今私の言葉から、どうしてそんな返しが来るわけ？」

それは僕も同感だ

「甘いですね会長。俺の思考回路は基本、まずはそつち方面に直結します！」

まあ鍵だからね

「何を跨ひしげばこ～ 杉崎はむづくめと副会長としての自覚をねえ・・・・」

「ありますよ。自覚。この生徒会は俺のハーレムだ」と、  
自覚なら十分

「

・・・

「ねえ 鍵？ 僕も生徒会の一員だつてことをお忘れなく。

「つ！（ゾワツ） あああ もちろん忘れてないよ  
「あ、

「ふうん。 じゃあ僕もハーレムの一員だつてこと？」

「ちつ違つよ

「まさか 鍵がホモだつたとは・・・

ひくわー」

「違うぞ！？ 誤解すんな！ ソラー！」

「じょーだん じょーだん。 だってそういう人なら  
友達になつてないもん」

「（ビクッ） そつそうか。 よかつた

ふう 鍵には困つたもんだ

皆来るの遅いな

あの2人の会話に入りたくないし 暇だ！

## ガラガラ

「キーくん。あんまりアカちゃんイジめちゃダメよ  
後、カイくん スルージャなくて助けてあげなさい?」

そういうながら、会長と同じ3年の書記である女性  
知弦先輩が入ってきた。

ちなみにカイくんとは、僕のこと。

僕の名前は『夜空』だから空を取つて英語に変換してスカイ  
スカイからスをとつて カイくん

「スルーっていうか関わりたくないんで、聞いてませんでした。」

「いやわ！ ううへ 知弦～水無瀬がいじめるよう～

「よしよし カイくん気持ちは分かるけど  
遠まわしに言ひづようにしなさい」

「えつ！？ 知弦！？ 気持ちわかるの！？」

「・・・(>\_<)」

知弦先輩が慈愛に満ちた目で会長を見つめる

はあ～ 今日も駄弁るだけかあ～（後書き）

えりでしたか？

ねたばつへくじなんぱーむー。(漫畫モード)

更新しますたw

めたまつづくしんせん一むー

今度は知弦先輩を加えての  
3人の話が始まった（ちなみに3人とは、会長、鍵、知弦先輩のこと）

「で、知弦さんは俺との恋を育みに来ててくれたわけですねー。」

「……………あ、うん、そうね」

鍵は知弦先輩にうわの空で言っていた。

「く・・・・・。しかしこういフクールキャラ一こそ、  
惚れたら激しいに違いない！」

「あ、それは正解。激しいわよ、私。小学校で、初恋の子に  
一日三百通『好きです』だけを羅列した手紙を渡して、  
果ては精神崩壊まで追い込んだから。  
意外と脆かったからそこで、恋は冷めちゃったけどね。・・・貴方  
はどうかしら。」

細田で口元に薄ら笑いを浮かべながら

「分かりました」

「え、この話聞いた上で覚悟できたの？  
私のすべてを受け容れるって？それ、ちょっとポイント高いわ、  
キー君。確かにキー君フラグが私の中若干

」

「知弦さんは、体だけの関係を田指します！心はいりません！」

「……………。…………… カイ君は？」

「僕ですか？僕はそれだけで精神崩壊するような  
やわな精神してませんので、受け容れますよ？」

「本当？私の中のカイ君のフラグがかなり上がったわ

「そうですか。よかったです」

「むう～ 微妙な反応ね」

知弦先輩は僕の反応を見て、おもしろくなさそうな顔をした  
なぜだろ？・・・

そんなことを考えていると  
会長が勝手に知弦先輩のスナック菓子に手を伸ばして  
いるのに気が付いた

何故、お菓子がここに？

スナックが会長の口に入る直前で、  
鍵が忠告する

「太りますよ」

「うぐつ。・・・だつ大丈夫。栄養を、背と胸に回すんだもん！」

「いいですけど。腹回りに回った時のリスクは多大なものがありますよ」

「だ、大丈夫！私ほら太りにくいからー！」

「胸と背も発達していくのですがね

「…………ええい！ はむ！」

あつ食べちゃった

僕は知弦先輩とアイコンタクトをし、

「ねえ、カイ君。この問題の回答って何か分かる？」

打ち合わせ通りに聞いてくる。

「…………ですか？」この回答は、『メタボリックシンдро́м』です  
ね

「…………あつがとう。」

「…………」

思った通り、会長はテンションが下がっていた

だいじょーぶ！

「大丈夫ですよ、会長。もし、もう手がなくなつたら……」

「え？ もしかして……太つた私でも、好きって  
言つてくれるの？ 美少女じゃなくなつても？ 杉崎……あなた。  
……」

「もういいみると涙ぐむ会長。……相手は鍵だぞ？」

「もういい手がなくなつたら……仕事に生きてください」

「リアルなアドバイス！？」

「ほらな？ やつぱり鍵は鍵だからな……

「会長。」

「なに？ 水無瀬？」

「太つたら、ダイエットして痩せねばむはなしじゃないですか」

「そ、それはそうね。」

「でしょ?」

はあ 鍵のフオロー……めんどくせつ

知弦先輩は本格的に宿題に取り組み始め、  
会長は開き直つて食べ始めたスナック菓子に夢中。

本当に太るんじやないか？ 会長。  
ダイエットも長続きしなさそうだし……

ガラガラ

「おつくれましたあー」

「すっすいません」

対照的な態度で入つてくる2人。

前を歩く元気少女、椎名深夏は鍵と同じく副会長で更に僕と鍵のクラスメイトである

この生徒会は人気投票で選ばれてるから

当然美少女。

特定の部活こそ入つていらないものの、運動神経が良くボーカル・ダンス・というか男口調。

快活で爽やかなことから、男子人気もさることながら、女子人気もかなり高い。しかも稀有なことに、

その本人からして百合気味なため、人気はうなぎのぼりだ。ただ・・・それだけに、鍵みたいな男は嫌いらしく、同じクラスで同じ副会長という立場も手伝つて、すぐに鍵と敵対する傾向にある

・・・僕はなぜか嫌われてないみたいだけどね・・・

## だいじょーぶー（後書き）

時間がないので、今日までに元気で元気にします  
短くてすいません>（――）<

あー・・・(前書き)

お気に入り登録がもう8件ありました!  
ありがとうございます!

あー・・・

そして、その背後からペコペコと僕たちに頭を下げつつ鍵と視線が合うと焦つてはずしてしまつ少女が、椎名真冬、深夏の妹で一年生。会計だが、この生徒会ではあまり分担は関係ない。

この子がまた、姉の深夏に全部元気を吸い取られて生まれてきたような儂げな子で、その上男性が苦手といつ。まあ・・・・・男性嫌いの原因は、確実に深夏だけど・・

(姉の百合趣味の毒牙にかかり、男性は怖いものだと思い込まされているみたいだ)

色素の薄いストレートヘアと白い肌、そしてちよこんとつけた、リボンがチャームポイント。

二人が席に着くなり、  
鍵が話しかけた。

「そうそう 深夏と真冬ちゃんは、『初めての時はあんなにおもしろかったのに』  
みたいなことって、なんかあるか?」

僕には聞いてくれないのか・・・

「まつ 真冬はお化粧・・・・コスメですかね」

へえ～ 意外だな

「化粧？」

「はい。子供の頃は母親がしているのを見て、すぐしたくてした  
くて  
仕方がなかつたんです。それで、中学生の頃、初めて自分の「コスメを  
買つたときは嬉しくてたまらなかつたんですけど・・・・。  
よく考えると真冬、あまり自分を着飾るのって好きじゃなかつたみ  
たいで、  
最近だと、最低限のことしかしたくないといいますか・・・・。」

なるほど

「なるほど 真冬らしいな  
僕的にはマイクで自分を偽るよりはそのままの方が  
いいと思うな。

「真冬はそのままでも十分かわいいと想つし」

「そつそつですか？ あつありがとづいたります。」

「うーひ、夜空ーあたしの前で妹を口説くなー！」

「えつ　ああ　ごめん。」

ふむ。 それでは深夏の前じゃなければ、真冬を口説いて  
いこと言うことになるな  
しないけど

「そういえば、キーくんは『優良枠』で  
入って来たんだっけ。・・・・・ とてもそうは思えないのに」

それは・・・・・ 同感だ

ちなみに僕は優良枠でも入ることはできたが・・・  
人気投票で上位だったのでそつちで入った。

女子は男女共通の憧れみたいな感じだけど、

男子は男子から反感を買つてイメージがあるので  
なんで、

女子「夜空くん！ がんばって！」

男子「ソラさん！ 頑張つてくださいーーー！」

と、女子からも男子からも言われるんだわ

天の声『それは、あなたがかっこかわいいし、嫉妬して向かってきました男子を  
一瞬で蹴散らすからですよ』

? なんかきこえたよ? う?

あー・・・(後書き)

短いですかね?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7349y/>

---

生徒会の新入り？

2011年11月24日19時51分発行